

3. 札幌メールクワイア40年を散見

(2015年 第27回定期演奏会プログラムより)

2代目団長 半田 祐司



「雄渾にして重厚なハーモニー それは 男声合唱のみが織りなす
美の世界。合唱界の泰斗 上元芳男先生に導かれながら 同好の友と
ふれあい 合唱のもつ大きなロマンに浸りませんか。」

「男声合唱団結成への誘い」と冠せられたチラシにはこう書かれていました。

この案内チラシの通り、1975年10月1日(水)午後7時、北海道クリスチャンセンターで、「札幌メールクワイア」は呱呱の声を上げました。議題には、まず「会の名称」が掲げられ、役員選出や会費などもテーマとされていました。発起人には、鈴木徹氏(初代団長)、小山竜平氏、加我英明氏(この「誘い」の作成者)の名が見えます。ここに上元芳男先生が加われ、主としてこの4氏の御尽力によって本団は船出を果たしたのです。

この流れを呼び起こしたのは、そもそも上元先生の指導のもと活躍著しかった「アポロ男声合唱団」の解散という原因があったそうです。小樽に在住されていた上元先生の肝いりで創られ、全日本コンクール北海道代表7度におよんで栄光をほしきままにしていたのが「アポロ男声合唱団」でした。ところが転勤や進学で団員の出入りが激しく合唱のレベルが低下したため、「栄光の歴史に傷をつけたくない」として告別演奏会を開いて深く解散した(初代団長の鈴木氏の説明による)という経緯があります。しかし、かつてのメンバーには「あのハーモニーよ、再び」の思い捨てがたく、それなら札幌にもう一度合唱団を創ろうということになったようです。その思いは燎原の火のごとく広がり、この10月1日へと繋がったのでした。開催が平日の午後7時。この時刻からも、集える「有志」が働き盛りの20代~40代であることを反映していて、当時の状況が垣間見えます。

そして1年4ヶ月後、1977年1月29日に、上元先生の懇篤丁寧な指導を経た第1回演奏会が旭川混声合唱団の男声部17名の賛助を得て共済ホールで開催されました(前日にはNHKテレビで初公演を迎えた男声合唱団として紹介)。それからは第6回演奏会まで毎年1月あるいは2月に定期的に演奏会を開催して成果を問うてきました。この間上元先生の愛娘・福井(旧姓・上元)早枝子さんがピアノを担当して下さっており、小山竜平氏も指揮者として多大の尽力があったと聞いています(1990年健康上の理由で退団)。

しかし、順調に進捗するはずの団の活動にも問題が発生。団員大半の諸事情と上元先生の病氣療養のため、活動が停滞し一時は休会をせざるを得なくなりました。1982年11月からは参加者少数で細々と再開しましたが、それから約4年というもの、存続がまさに風前の灯火であった訳です。

この窮状を見かねて、自らの演奏会に賛助出演を促されるという温かい支援をして下さったのが女声合唱・嶺の会でした。1984年7月27日、久しぶりに教育文化会館<以下、教文と略>小ホールのステージに立つことが出来た本団19名のメンバーの心境はいかばかりだったかと思います(このような経緯から嶺の会との交歓演奏会もこれまでに9回に及んでいます)。その後、健康を回復された上元先生の情熱と薫陶に応じて40名のメンバーで1986年2月23日第7回演奏会を教文で開催できるまでになり、そこでは、先に温かい支援を下された嶺の会に賛助出演頂きました。翌年、第8回演奏会(1987年2月22日)の後には、このように団復調の流れを得ても再び凋落の憂き目を見ることのないよう、団の活性化を図っていく一環として選んだのが、千歳市民文化センターでの合唱コンクール北海道大会(9月27日)へのデビューでした(銅賞)。ついでながらメンバーが総勢60名にも及んで、会場からは驚きのどよめきが起ったそうです。その熱気はなお衰えることなく、10月24日には年内に2度目となる第9回演奏会(於 ザ・ルーテルホール)も51名のメンバーで開催されました。

団の活性化の手段として挑んだコンクールの実績は、1988年小樽市民会館での演奏（31名）、1989年札幌市民会館での演奏（31名）、1990年釧路市民文化会館での演奏（32名）に対してそれぞれ金賞が授与されました。ちなみに釧路での演奏曲、「オホーツク譚詩曲」は上元先生ご自身の作詞作曲になるもので初演でした（後に「積丹バラード」と「えりもバラード」が加わって組曲「北のバラード」に編成）。

1991年には上元先生に顧問指揮者、長田守弘氏に常任指揮者（翌年、庄司努氏、新井聡氏に副指揮者）を託した総会での役員改選を経て、コンクールの指揮も長田氏が担当するところとなりました。1991年帯広市民文化ホールでの演奏（41名）、1992年函館市民会館での演奏（36名）に対しては銅賞が、1993年旭川市民文化会館での演奏（35名）、1995年釧路市民文化会館での演奏（29名）に対しては銀賞が授与され、1996年小樽市民会館の演奏（31名）には銅賞が授与されました。

相前後して、団活動の活性化は、団員が恒常的に確保されていないと難しいから積極的な勧誘を組織的に試みるべきだとの意向が強まってきました。1994年の総会では「スカウト担当」（4名）なる役員が誕生しました。確かにこれまでの団員集めは、創団当時から上元先生の教育界における広範な人脈にほとんど寄りかかっていましたので、これからは自前の人集めに奮励しようとの自覚が生み出した役員でした。夜の「すすきの」で、いわば「釣り堀り」を見出し、カラオケでの歌声を聴いて「よし」となれば次は釣り糸を垂らして人柄吟味。酒をほとんど飲めなくともせつせと足を運んだ甲斐あって、かなりの釣果（失礼！）が上がりました。さらには、団の結束を強めるには団員の相互理解を深める場も用意されなくてはなるまいとの思いから新しい企ても考えられました。なるほど以前から演奏会あるいはコンクールを目指して実施していた合宿では、練習を終えて夜半深更に及ぶ酒と熱弁のために翌日の練習ではソットボーチェ？で歌うしかなくなるような事態もしばしばあったのですが、それでも団内の親和や友好にそれなりの効用をもたらしてくれてはいたのです。しかしそれはそれとして、団員が各自の志向やパーソナリティーを酔眼ではなく青眼のままに分かり合える場として提案されたのが「20分卓話」でした。音楽とは直接関係なく「昼の顔」のままに語られるのを聞かせて貰えて、スピーカーの「人となり」をうかがい知ることができました。

また、活動の順調な運営と発展のかなめは、家庭の理解と支援にあずかることだとも思い至りました。そこで、平均30～40代の夫あるいは父を家庭から日曜ごとに奪うにも関わらず、快く練習やコンクールなどに出して下さる家族に対して感謝し活動の一端を見てもらう場を用意したのが、家族を招待して楽しむ「ハート&ハートの会」でした。参加されたご家族の笑顔を見て、気が少し軽くなったような印象を得られたことを今も思い起こします。

こうして、知恵を出し合い歩いていく軌道が敷かれつつあった頃、1996年4月23日上元先生が肝がんの治療も空しく、83年の生涯を閉じられました。5日後に札幌霊堂で「告別のつどい」が催され、故人から指導を受けてきた縁の深い静麗会、北洋銀行合唱団と本団が参列し、弔問者とともに音楽葬でお別れしました。団創設から21年。上元先生に薫陶を頂いて、われわれは、言わば「上元ワールド」に誘われてきました。先生は、かつてそのジャンルを、宗教曲、民族の雄叫びが聞こえるような民族音楽、北海道や日本でまだ歌われていない未発表曲の3分野に求めたいと説明され、それを縷々追求されていました。また、我が団のあり方としては、単なる「仲良しクラブ」で満足することを避けるべきだとも言い遣されました。メールクワイアの創団から約20年。我が団は上元先生の翼に守られ飛翔できた経緯から、この間の団の歩みを回顧することは、即ち先生との関わりを語ることになってしまいますが、ご海容下さい。

それからの20年。まず、先生の生前中からすでに常任指揮者を勤めていた長田守弘氏、副指揮者の庄司努氏、新井聡氏の尽力によって葬儀の40日後ではありましたが、20周年に当たる第13回演奏会を予定通り開催しました。喪に服する気持ちでステージに上った団員の顔と顔が、今なお浮かびます。